
三人の神父

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

三人の神父

【Nコード】

N7779C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

第一次世界大戦終結直後のクロアチア。そこに新たに赴任した二人の神父は前任者の神父と出会う。彼は既に死んでいたが。バルカン半島の複雑な民族対立と信仰、平和がテーマです。

第一章

三人の神父

バルカン半島、今で言うところクロアチアの辺りだろうか。とりあえずその辺りの話だ。

この辺りは昔から何かと騒がしく物騒な話が多かった。第一次世界大戦が起こったのもセルビアだったからしそのセルビアと犬猿の仲だったのがクロアチアである。民族的にも複雑だが宗教的にも実に複雑な場所である。丁度その第一次世界大戦が終わった直後のこの辺りに二人の修道僧が歩いていった。黒い法衣を着て頭の頂上を剃っている。質素であるが実に清潔な身なりをしていた。手には聖書があり首からはロザリオをかけている。

荒野であつた。人もおらず見えるのは乾いた土地と枯れた木々だけだ。草も碌に生えてはいない。それを見て若い方の僧侶が悲しい顔で述べた。

「やはり酷いものですね」

「はい」

年配の僧侶がそれに応えて頷く。二人は悲しい顔で道を進んでいた。

「これも戦乱のせいでしょうか」

「それ以外に理由はありませんか？」

年配いた僧侶は若い僧侶に問い返す。

「全てはそのせいです」

「この辺りもまたあの戦争に巻き込まれたのですね」

「いえ、それよりも前からです」

年配いた僧侶は答える。

「前から」

「ベネヴィクトさん」

年配いた僧侶はここで若い僧侶の名を呼んできた。

「何でしょうか」

「貴方は確かイタリア生まれでしたね」

「ええ」

ベネヴィクトと呼ばれたその若い僧はその問いにこくりと頷いてきた。

「それは以前に申し上げた通りです」

「そうですか。私はオーストリアの生まれです」

「おや、そうだったのですか」

ベネヴィクトはその言葉に目を少しだけ丸くさせた。意外といった顔であった。年老いた僧の瞳は黒く髪も黒だ。顔立ちもそれ程ゲルマンの雰囲気はない。それに対してベネヴィクトは茶色い髪と目の美男子で朗らかな印象を受ける。それを見ると彼がラテン系であるのがすぐにわかる。

「そうです。それでここにも来たことがあります」

「それは初耳でした、グレゴリオさん」

ベネヴィクトは年老いた僧侶の名を呼んで応える。

「貴方がここに来られたこともあったとは」

「ここに来たのは医師について行ってのことでした」

「それは何時頃ですか？」

「もう二十年も前になるでしょうか」

前を進みながら答える。道は埃だらけで碌に整備もされてはいない。やはり通り掛かる人影は全くなく何も無い荒野だけが広がり二人はその道を進むだけであった。

「ここに来たことがあります」

「その時は何があったのですか？」

「同じです」

グレゴリオは嘆息してベネヴィクトに答えてきた。

「あの戦争と同じことが起こっていました」

「そうだったのですか」

ベネヴィクトはグレゴリオのその言葉を聞いて悲しい目になった。

その目で俯く。

「じゃあその時のことは」

「今でもはつきり覚えています」

彼はそう述べる。

「隣人同士が争い醜く殺し合う。しかも同じ神の下で」

「同じ神の下で」

「例え兄弟であつてもです。民族が違うという理由だけで」

「民族がですか」

「他にも争う理由はありました」

彼はまた述べた。風が吹いてきたが乾いた風だった。埃だけが舞い二人の法衣に付く。

「同じ民族であつても神が違うという理由で」

「ここの複雑さは私も存じているつもりです」

ベネヴィクトは悲しい顔をしたままのグレゴリオに述べてきた。

「戦争が絶えなかったことも」

この半島、一時期ユーゴスラビアと呼ばれた地域に様々なものが詰まっていたのだ。二つの文字に三つの宗教、四つの言語、五つの民族、六つの共和国、七つの隣国という言葉が第二次世界大戦後にあつた。そうした地域である。様々な民族が様々な宗教、文字、言語と共に入り混じりモザイクとなっていたのである。しかも混血もあつた。全てが複雑に入り組んだ社会だったのである。

二人はローマからここの教会に派遣されてきているのだ。つまりカトリックである。この半島にはカトリックも存在し力を持っているたのである。

「ですが。この有様は」

「ベネヴィクトさん、貴方はここには来られたことはないのですね」

「はい、そうです」

ベネヴィクトはあらためてそれを答えてきた。

「フランスやスペインには行ったことがありますか」

「どちらもカトリックの力が強い国です」

「ええ、その通りです」

グレゴリオのその言葉にこくりと頷く。彼はグレゴリオの横を歩いている。年老いた彼の足に合わせてわざとゆっくりめに歩いている。

「特にスペインはそうでした」

「異なる宗教が共にある社会は御存知なかったのですね」

「そうです」

また質問に答えて頷く。

「そうしたことは何も」

「それは私も同じでした」

グレゴリオは前を見て歩きながら述べる。目は遠くのものを見る感じであった。

「オーストリアのカトリックの強い地域にいましたから」

「はあ」

「最初にここに来た時は特に何も考えてはいませんでした」

「どう思われていましたか？」

「普通の戦争だと思っていました」

そう述べる。

「よくあるような銃や剣を使った。しかし」

「しかし？」

グレゴリオの言葉に顔を向ける。その顔が怪訝なものになっていた。

第二章

「それは大きな誤りでした。この国にあるのは憎悪でした」
「憎悪!？」

「はい、憎しみです。それに満ちた世界でした」

「御言葉ですがグレゴリオさん」

ベネヴィクトはあえて反論してきた。ベネヴィクトの顔を見ながら。
ら。

「戦争ならば。何処も同じことでは」

「ここにいるのは普通の憎悪ではないのです」

グレゴリオは自分に顔を向けるベネヴィクトに対して述べる。やはり前を見ている。まるでその先に何かがあるように、その何かも非常に悲しいものであるようだった。

「長年に渡って培われてきた恨みと報復、そうしたもので出来上がった」

「特別な憎しみですか」

「どの場所にもそうしたものはあるでしょう」

やはり前を見たまま言う。それに対してベネヴィクトはずっとグレゴリオの顔を見ている。

「しかしここは」

「遙かに酷いのですか」

「そうです。その証拠がこの道です」

そうしてこの道のことについて述べてきた。

「私が最初にこの道に来た時は周りに家々が立ち並び木々にも緑がありました」

「まさか」

ベネヴィクトはその言葉に目を顰めさせる。

「ここにですか」

「信じられませんか」

「とても」

その言葉には首を振るしかなかった。今このような荒れ果てた荒野にどうしてそのようなものがあるのか。彼はグレゴリオの人柄の誠実なことを知っている。だから余計にその言葉が信じられなかったのである。嘘ではないとわかつていながらも。

「この道が」

「少し行くと街がありました」

「街がですか」

「セルビア人により焼かれたのです」

その知的な目に深い悲しみをたたえて述べる。

「昨日まで隣人として楽しくやっていたセルビア人達に」

「何故また」

「ここにセルビアとオーストリアの軍が来まして。カトリックとギリシア正教の争いで」

「それですじゃ」

「彼等は同じセルビア人まで殺しました」

声が詰まった。

「宗教が違うという理由で」

「それですか」

「はい、私には彼等は同じに見えました」

沈んだ声になっていた。その声で言うのだった。

「どちらも」

「カトリックの者達も正教の者達もですか!？」

「ムスリム達も。皆同じでした」

語るその顔も声も悲しげなものだった。その声で語る言葉は沈痛なものであった。

「憎悪に満ちた顔でお互い殺し合い。その先には何もありませんでした」

「そうなのでしょうか」

「そうです。私もそれを実感できませんでした」

またベネヴィクトに語る。

「ここに来るまではとても」

「私にはわかりません」

ベネヴィクトはそれを聞いてもまだそれを信じてはいなかった。信じたくないと言ってもいいかも知れない。とにかく信じてはいなかったのだった。

「異端、もう古い言葉ですが」

「それについても考えました」

一歩一歩がまるで人生の歩みのように遅く、重くなっていくのを感じていた。それを感じると心がさらに重くなることも感じていたのだった。

「けれど。何もかもが同じでした」

「何もかもが」

「教えの中身が違うだけで。私達もまた憎悪に歪んでいたのです」

「正教の者達と同じく」

「思えば当然なのです」

グレゴリオはこうも言う。

「私達は互いに争い、殺し合っているのですから。当然なのです」

「グレゴリオさん」

ここでまたベネヴィクトは彼に顔を向けて問う。

「その時の争いでは何も残らなかったのですね」

「憎悪だけが残りました」

首を横に振ってベネヴィクトに述べる。

「他には何も。憎しみが生み出すのは憎しみだけです」

「憎しみだけですか」

「他に何が生まれますか？」

逆に彼に問うてきた。

「憎しみから何が。生まれるものは何もないのですよ」

「はあ」

「私は何も出来ませんでした」

前を見るその目が遠くを見ていた。しかし見えているものは決していいものではない。深く沈んで明るいものは何もなかった。それがグレゴリオがここで見てきたものだったのだ。

「彼等の争いを止めることも何も。お医者さんもまた」

「傷ついた者を助けるだけですか」

「傷が癒えたならばすぐにまた戦いに向かう」

「そんな、それでは」

「だからです」

彼は言う。

「そこには何もありません。傷を受け倒れている間も呪詛の言葉を吐き、そして傷が癒えたならば復讐を考える。その繰り返しばかりでした」

「その結果がこの有様ですか」

「丁度この辺りでした」

一本の大きな木が右手に見えた。その木も枯れ果てていた。少なくともそこには緑の恵みも豊かさも何もなかった。幽霊のように立っていただけだった。

「セルビア人とクロアチア人達が殺し合ったのですよ」

「同じカトリックののでしょうか」

「はい、その通りです」

グレゴリオは歩きながら静かに答えてきた。

「私も医師も止めようと思いました。しかし憎悪に燃える彼等はそれを聞かず」

「殺し合い。そして」

「誰もいなくなりました。後には血の匂いと屍だけがありました」

「やはり」

「その結果。ここには誰もいなくなつたのです」

この荒野を生んだのは憎しみだったのだ。果てしない憎悪と殺戮が人も何もかもを消し去ってしまったのだった。グレゴリオは今それをベネヴィクトに語っていた。悲しい過去と真実を。

「神は助けられなかったのでしょうか」

ベネヴィクトはそこまで聞いて上を見上げた。そうして深い溜息をついた。

「彼等の心を」

「どうなのでしょうか」

グレゴリオはそれに答えない。答えられなかった。

第三章

「先の戦争でも誰も殺し合い、そうしてまた血に覆われ」

「また憎しみが深まり」

「何時かそれがなくなればいいのですが」

「それができればいいのですが」

グレゴリオは言う。しかしそれは適わぬものにも思えた。

「ですが今は」

「果たせませんか」

「私は何の力もありませんでした」

また過去を見て語る。

「今もまた」

「ですがグレゴリオさん」

ベネヴィクトも声は沈んでしまっていた。しかしそれでも彼に対して言うのだ。

「我々もまた」

「はい。行くしかありません」

こくりと頷いて答える。

「我々の行くべき場所へ」

「行きましょう、是非」

グレゴリオを励ますように言う。今二人は何もない荒野を進む。果てしないと思われた荒野もやがて終わり小さな街が見えてきた。それが彼等の赴任する街だったのだ。

「ここですね」

「はい」

グレゴリオはベネヴィクトの言葉に頷く。

「この街の教会です」

「そうですね。しかし」

その東欧風の建物が並ぶ小さな街を応える。

「人がいませんね」

「外にはですね」

グレゴリオは答える。

「誰も出ていません」

「まさかとは思いますが」

ベネヴィクトは恐る恐るグレゴリオに声をかける。

「この街もまた」

「まさか」

グレゴリオはその言葉に顔を暗くさせる。

「ですがこの辺りも戦乱があつたのですよね」

「ええ、確か」

その問いに苦い顔で頷く。それは彼もわかつていた。そもそもがこの辺りの民族紛争が発端となつた戦いである。皇太子をセルビア人に殺されたオーストリアがクロアチア人を炊きつけたりもしたのだ。これがバルカン半島の歴史だ。大国が介入して互いを憎み合わせたりもする。そうして悲劇は無限に増えていつているのだ。

「この村はクロアチア人の村です」

「そして」

「隣にはセルビア人の村があります。だから」

「殺し合いが行われたのは間違いないでしょうね」

「おそらく」

暗い顔で答える。この地域での殺戮は実に生臭く醜悪なものもある。惨たらしい虐殺だけではない。女子供であるうとも容赦なくその対象にする。所謂民族浄化も以前からある。混血児が何故存在するのか。それは決していい結果だけではないのである。

「あつたでしょう」

「それにしてもですね」

「ここでベネヴィクトは首を傾げて言ってきた。

「何でしょうか」

「この辺りは本当に住んでいる場所まで入り組んでいるのですね」

「そうなのです」

グレゴリオはその言葉にも答える。答えながら深く息を吐き出す。
「そもそもですね」

「そもそも？」

「彼等は同じスラブ人なのです」

実はそうなのだ。セルビア人もクロアチア人も同じスラブ人なのだ。言語や風俗習慣も実によく似ているのである。その違いという

と。
「貴方のお国とさして変わらない程です」

「イタリアとですか」

「そうです。貴方の国がそれぞれの地域で独自性があるのと同じ程度です。本当にそれだけの差でしかないのですよ」

むしろよりその差は少ないのかも知れない。それだけの差なのだ。

「それが。こうして」

「争うと」

「そうです。それで」

争うのだと。そう言うのだ。ベネヴィクトはこのことにあらためて溜息をつくのだった。

「やりきれませんね。イタリアでもそんなことはないです」

「周辺の国々の介入はあったとしても」

「むしろそれを逆に利用してやりますよ」

ベネヴィクトは不敵に笑って言い返した。実はイタリアの外交ではこうしたことは日常茶飯事であった。イタリアは普通に外交をしてきた国ではないのだ。いつもそうして侵略者を逆手に取ってきた。イタリアの外交はこうしたことにはじまっている。

「ここはそれができなかったのですね」

「無理ですね、それをするにはあまりにも」

「純粹であったと」

「純粹なのは事実です。それは確かにいいことです」

「しかしそれだけでは駄目だと」

「他の者を認めることもまた必要なのです。しかし彼等は」
相変わらず誰もいない街を進んでいく。それは二人が今まで歩いてきた荒野とあまり変わりがなかった。気味悪い程同じものに見えるのだった。

第四章

「それができませんでした」

「その結果ですか」

「おそらくは。これからかもしれません」

グレゴリオは予言をしたつもりではなかった。しかしこの言葉は予言になってしまった。第二次世界大戦でもユーゴスラビアが分裂してからも彼等は同じだった。やはり互いに憎しみ合い殺し合ってきた。チトーは自らへの批判は許したが民族運動だけは何があっても許さずあくまで弾圧し続けた。それと同時に民族間の融和、とりわけ婚姻を推し進めた。かつては『五つの民族が仲良く暮らす国』とまで呼ばれていた。オリンピックで彼等は仲良く様々な色の服を着て肩を組んでいた。それは最早うたかたの中に消え去ってしまった。そのオリンピックで彼等が笑顔でいた場所も廃墟に成り果てた。彼等が失ったものは全てであり残ったのは憎悪だけだった。他には何も残らなかった。彼の言葉は無慈悲な予言になってしまったのだ。

「少しでもそれを和らげられたらいいのですが」

「その為に私達は来たのですが」

「しかし」

グレゴリオはまた顔を暗くさせる。

「この何もない場所で何ができるでしょうか」

「グレゴリオさん」

ベネヴィクトはあまりにも沈む彼に対して思わず声をかけた。

「あまりそうして頂垂れられても」

「わかつてはいます」

やはり頂垂れて答える。

「わかつてはいますが。しかし」

「まずは教会に行きましょう」

彼はそうグレゴリオに述べた。

「それから。そこで働いて」

「そうですね。そうすれば少し考えも変わるでしょうし」
僚友の言葉に頷くことにした。まだ辺りを見回す。

「それにしても困りましたね」

「どうしましたか？」

「教会が見当たりません」

困った顔でこう述べてきた。

「何処にあるのでしょうか。そろそろかなと思うのですが」

「そういえば」

その言葉にベネヴィクトも気付く。

「見当たりませんね。同じような建物ばかりで」

「この街にあるのは確かなのです」

怪訝な顔でまたベネヴィクトに答える。

「しかし。それが無いのは」

「何故でしょうか」

「どちらにしろ。辿り着かないことには」

浮かない顔になってきた。あまり見ていていい顔ではない。その顔で辺りを見回しているがやはり誰にも会えない。そのことでも途方に暮れてしまう。

「人もいませんし」

「まさか誰もいないというのはないですよね」

ベネヴィクトは不安げな顔でグレゴリオに問うた。

「幾ら何でも」

「それは流石にないと思います」

グレゴリオもそう返す。

「確かに戦乱はありましたがそれなら」

「家々も破壊され尽くしている筈ですし」

見ればどの家も奇麗なものである。何も妙なところはない。彼等はそれを見てもおかしいと思っていたのだ。それなのにどうして人がいないのか。今この街はさながらゴーストタウンであった。いや、

ゴーストタウンそのものであった。

「ではどうして」

「お待ち下さい」

ここで一軒の居酒屋に気付いた。

「あそこでお話を聞いてみますか」

「そうですね。お腹も空いてきましたことですし」

ベネヴィクトはここで俗世的なことを口にしてきた。

「中に誰かがおられればですが」

「おられることを祈りましょう」

グレゴリオもいささか悲觀的にこう言う。

「それでは」

「ええ」

こうして二人は店に向かった。扉は開いていた。従って店の中も薄暗いながらちゃんと机や椅子があった。そこには一人の老婆がいた。

「お坊さんですか」

「はい」

「そうですか」

二人は店の隅で蹲るようにして座っている老婆に挨拶をして述べた。

「ワインと食べ物を頂きたいのですが」

「宜しいでしょうか」

「ええ、いいですよ」

老婆はその言葉にゆっくりと頷いてきた。そうして一旦立ち上がり店の奥からハムと黒パン、そして赤ワインを出してきた。それを店のテーブルの一つに座る二人に出してきた。

「粗末なものです」

「いえ、有り難い神の御恵みです」

「喜んで受け取らせて頂きます」

二人の信仰はかなり真面目なものだった。だからここに来るま

でもかなり悩んでいたのだ。今もその信仰を述べた。そうして食事をはじめた。

食事をしながら。さりげなく老婆に問うた。

「ところでお婆さん」

問うたのはベネヴィクトであった。あらかじめ学んでいたたどたどしさの残るクロアチア語で老婆に声をかける。

「この街に教会があった筈ですが」

「ああ、カトリックのですね」

「そうです。それは何処にあるでしょうか」

ワインを飲んだ後で問う。そのうえで返事を待つ。

「この街にありますよね」

「ええ、あります」

老婆はその言葉に頷いてきた。二人はそれを聞いてまずは安堵した。

「この店を左に曲がってまっすぐに行くとき暫くして右手に大きな十字架の教会が」

「あるのですね」

「そうです。ただ」

「ここで老婆は顔を暗くさせてきた。

「ただ？何か」

「お坊さん方はどうしてここに来られたのですか？こんな何も無い街に」

「それが神に与えられた仕事だからです」

今度はグレゴリオが答えてきた。

「その教会で務めるようにと。それで」

「来られたのですね」

「はい」

グレゴリオは老婆の言葉に静かに答えてきた。

「その通りです。それで来たのですが」

「そうだったのですか。それは」

感心したような言葉ではなかった。苦勞を哀れむこつな言葉であった。

「あそこへ行かれるとは」

「何かあるのですか？」

老婆の口調のその微妙な響きに気付いたベネヴィクトは彼女に問うた。

「教会に」

「あるのです、それが」

老婆は今度は疲れ切ったような声を出してきた。その声で二人に述べるのだった。

第五章

「前の戦争で。隣の街と派手にやり合いました」

「はい」

二人は神妙な顔でその言葉を聞く。わかってはいたが当事者の言葉は耳にするだけでかなり辛いものがある。だからついついそうした顔になってしまったのだ。

「それで多くの血が流れました。私の亭主もまた」

「お亡くなりになりましたか」

「左様で」

ここで声がかかなり沈んでしまっていた。

「あの教会にいた神父様は私達の争いを深く悲しまれ」

「そしてどうなったのですか？」

「私達の間に入られて。それで」

「何と」

グレゴリオもベネヴィクトもそれを聞いて言葉を失った。まさかそこまでだったとは思わなかったのだ。それは言葉を失うに充分であつた。

「左様でしたか」

「はい」

老婆は悲しい顔でそう述べてきた。

「おわかりになられましたか。何があつたのか」

「わかりました」

ベネヴィクトは頭を垂れて答えてきた。グレゴリオも同じである。

「悲しいことです」

「そしてその神父の御名前は確か」

グレゴリオは今度は老婆にそれを問うた。

「アレクシス神父でしたね」

「そうです、その方です」

老婆はその問いにまた答えてきた。

「立派な方でした」

「そうです。私達はその方の後を受ける為にここに来ました」
そうして老婆に言う。

「そのアレクシス神父の志を受け継ぐ為に」

「ここに」

「それはいいことです。しかし」

だが老婆はここで顔を暗くさせてきた。

「それは」

「どうかされたのですか？」

「一体何が」

「神父様はまだ生きておられるのです」

老婆はそう言うのだ。

「生きている！？まさか」

「いや、ベネヴィクトさん」

ここでグレゴリオの顔が剣呑なものになった。彼はここであることを察したのである。

「若しかしたらこれは」

「？何かあるのですか？」

ベネヴィクトは彼の言葉を聞いて怪訝な顔を見せてきた。

「一体何が」

「ここでは何です」

しかし彼はここでは話そうとはしなかった。何かを察した顔であった。

「後で」

「一体何ですか？」

ベネヴィクトにはまだ何のことかわからなかった。彼はイタリア生まれでありバルカン半島のことには疎い。だからどうしても知らないことがあったのだ。

「アレクシス神父が生きているなどと」

「それがあるのです」

彼はまた言う。

「そのお話は後で」

「はあ」

「それではまた」

ベネヴィクトに述べた後で老婆に顔を戻す。そうして挨拶をして別れるのであった。

道に出るとベネヴィクトは早速グレゴリオに顔を向けて来た。そして怪訝な顔で問うのであった。

「あの、グレゴリオさん」

「わかっています」

グレゴリオは前を見たまま静かにベネヴィクトに答えてきた。

「まだアレクシス神父が生きていますかどうかですね」

「そんなことは有り得ません」

彼は顔を顰めさせて述べてきた。

「死んだ者が生き返るなぞ。そんなことが」

「イタリアではそうですね」

ベネヴィクトはそれを聞いて顔を顰めさせてきた。彼にはどうしてもわからない話だった。

「仰る意味がよくわかりませんが」

「ここはスラブです」

彼は言うのだった。

「死者が蘇り生者を襲うことがあるのです」

「何ですか、それは」

ベネヴィクトにはわからないことばかりだった。それは彼の知らない世界であった。

「一体何が何なのか」

「吸血鬼です」

グレゴリオは答えた。

「スラブでは死した者は時として吸血鬼となり蘇り生きる者の血を

啜ることがあるのです」

「馬鹿な」

ベネヴィクトはそれを聞いて顔を顰めさせる。

「そんなことがある筈が」

「本質的に違う世界なのです」

彼はまた述べてきた。

「イタリアとは」

「吸血鬼ですか」

ベネヴィクトはその不吉な名を聞いてまた顔を暗くさせた。

「それではアレクセイ神父もまた」

「吸血鬼になる場合は生前に恨みや悲しみを残して死んだ場合なのです」

そうベネヴィクトに述べる。

「アレクセイ神父もそうならば」

グレゴリオ神父はきつと目を強くさせてきた。その目は覚悟を決めた目であった。

「払わなければなりません」

「払う……ですか」

「ベネヴィクトさん」

前を見据えたままベネヴィクトに声をかけてきた。

「何ですか？」

「覚悟を決めて下さい」

「覚悟ですか」

「頼りは十字架と聖書です」

神に仕える者ならば誰もが持っているもの、それを今出してきた。

「その二つと信仰が頼りです」

「まさかとは思いますが魔を払うのですか？」

「その通りです」

何故意を決した顔になったのか、ようやくわかった。それは彼にも及んでいた。

「いいですね。今ここで」

「わかりました。それでは」

ベネヴィクトもまた意を決した顔になった。彼もまた神に仕える者だ。信仰も覚悟もあった。その二つも持って今教会に向かうのであった。

第六章

教会が誰もいない道に見えてきた。ここでベネヴィクトは言ってきた。

「まさか今まで街に誰もいなかったのは」

「そうです」

グレゴリオはその問いに答える。

「吸血鬼となってしまうたアレクセイ神父を恐れてのことでしょう。ほら」

「ここで側の家の扉を指差す。」

「御覧下さい、あれを」

「あれは」

ベネヴィクトはここで扉にかけているものを見た。それを見て目を顰めさせる。

「大蒜、ですね」

見ればその通りだった。大蒜が数個束ねて吊り下げられていた。ベネヴィクトの目には実に奇怪なものに映った。何故大蒜がかけてあるのかわからなかったのだ。

「何故かけられているのですか？」

「それです」

グレゴリオはそこに言及してきた。

「大蒜がかけられているのはそれです。吸血鬼を避ける為です」

「御守りでしょうか」

「吸血鬼は大蒜を嫌いますので」

「それですか」

「はい、おわかりになりましたね」

「ええ、それでしたら」

ここまで聞いてようやくわかった。見ればどの家の扉にも大蒜が束になってかけられている。それを見ているとこの街の人々がどれ

だけ吸血鬼という存在を恐れているのか、それがグレゴリオにもわかったのであった。

「そういうことだったのですか」

「私もあの御老人のお話を聞くまでは考えが到りませんでした」
グレゴリオは言う。

「しかし間違いないようです。それなら」

「払うのですね」

「アレクセイ神父は立派な方だったと聞いてはいます」

だから正直吸血鬼のような忌まわしい存在になったとは思いたくはないのである。しかし扉にかけられている大蒜や老婆の話を知っているところとしか思えないのであった。グレゴリオは悲しみながらも覚悟を決めていたのである。

「ですが」

「それでも、ですね」

「立派な方だったからこそというのもあります」
グレゴリオは言う。

「是非。邪念を払いたいです。宜しいですね」

「はい」

ベネヴィクトも真摯な顔で応える。

「それでは私も。参りましょう」

「感謝します。それでは」

教会の前に来た。古ぼけた教会である。少し見ただけでは廃墟に見えてしまうようなものだ。二人は今その教会の扉の前に立っていた。

「ここですね、その教会は」

「そうです。ただ」

ここでグレゴリオは言ってきた。怪訝な顔で。

「感じませんね」

「確かに」

ベネヴィクトもそれに頷く。彼も身構えていたがそれだけに感じ

るものは感じる筈であった。ところが彼もグレゴリオも今はそれを感じていなかったのだ。

「ただ。妙ですね」

「ええ」

グレゴリオはベネヴィクトのその言葉に頷く。

「何か。何一つとして邪悪なものを感じません」

「そうですね。むしろ」

ベネヴィクトは言う。

「普通の教会よりも穏やかなものを感じませんか。入り口だけだといつのに」

「そうですね。こんなことは今までありませんでした」

グレゴリオはそう述べる。

「私もそれなりに色々な教会を巡ってきましたが」

「畏でしょうか」

ベネヴィクトはふと言ってきた。

「これは若しかすると」

「アレクセイ神父の」

「有り得えるのでは。悪魔はその牙も爪も隠すものですから」

「それではこれこそがアレクセイ神父が死して尚生きている証」

彼等はそう思った。

「ならば。ベネヴィクトさん」

「ええ」

二人は顔を見合わせて頷き合う。

「用心して参りましょう」

「それでは二人で」

肩を寄せ合うようにして先に進み扉をゆっくりと開ける。そうして扉の中を覗き込むとそこは薄暗い礼拝堂であった。ステンドガラスと十字架、礼拝堂が奥に見える。十字架の上にいる主は何も語らずにそこにかかけられているだけだった。

「ようこそ」

二人が扉を開けたその時に声がした。

「教会に来られました。何の御用件でしょうか」

「アレクセイ神父でしょうか」

グレゴリオが最初に入り彼に問うた。

「おられますか？」

すぐにベネヴィクトが横に来て二人並ぶ。扉に完全に背をつけて左右をそれぞれ見る。彼等は本能的に死角を見せないようにしていたのである。

「おられたら返事を御願いします」

「私がベネヴィクトです」

声だけがした。しかし姿は見えない。

「何の御用でしょうか」

「私達はローマから派遣されてきました」

今度はベネヴィクトが言ってきた。やはり隙は見せてはいない。

彼は格闘技の類は一切知らない学究の徒であるがここでも本能的にそうしていたのだ。これは無意識のうちでの動きであった。

第七章

「この教会に」

「そうなのですか」

アレクセイの声がそれに応えてきた。

「この教会に」

「私の言っている意味がおわかりになられていると思います」
ベネヴィクトはまた言った。

「アレクセイ神父、貴方にかわって」

「我々はこちらに来たのです」

「はい」

アレクセイはその言葉に頷いてきた。それでも姿は見えない。二人はそれを確かめてより警戒の念を強めた。それはまるで獲物に狙われている動物のようであった。

「そうですか。遂に」

「宜しければ姿を見せて頂けますか？」

またグレゴリオが申し出てきた。

「私達の前に」

「私の姿をですか」

「見せられる筈だと思いますが？」

グレゴリオはあえてこう言った。まるで彼を挑発し、誘うように。
「ですから。さあ」

また呼ぶ。

「こちらにまで。おいで下さい」

「わかりました」

神父の声が彼の言葉に頷いてきた。これでそれがわかる。

「それでは。驚かれることのないよう」

「ええ」

グレゴリオは応えながらちらりとベネヴィクトに顔をやってきた。

そのうえで彼に囁く。

「いいですね」

「はい」

ベネヴィクトも小声でそれに頷いてきた。頷くその顔はこれまでよりもさらに緊張して強張ったものであった。まるで戦場にいるかのように。

「来ますよ」

「十字架ですね」

「そう、そして聖書です」

彼はまた言う。

「その二つと確かな心があれば」

「払えると」

「若し何かがあれば」

グレゴリオはまた強張った顔で囁く。彼もまた緊張を頂点まで高めていた。

「すぐにでも」

「はい、それでは」

二人はアレクセイを待ち受けていた。そうしてそのアレクセイが姿を現わす。彼は二人の予想通り、老婆の言葉通り生者ではなくなっていた。透き通った姿で今礼拝堂の中央、左右に席が並んだ木造の廊下の部分に姿を現わしたのであった。

「むっ」

「やはりっ」

二人はすぐにそれを見て手に持っている十字架を突き出してきた。そうして左手に聖書を持ってすぐにその中にある神の言葉を唱えはじめたのであった。

しかしアレクセイには何の変化もなかった。ただにこやかに、静かに笑ってそこに立っているだけであった。年老いた気品のある外見の神父がそこにいた。その姿を見ていると落ち着くものがある。既にその身体はなくなってしまっているというのだ。

「御安心下さい」

アレクセイはにこやかに笑って二人に言ってきた。

「私は。人に害を加えるつもりはありません」

「まさか」

ベネヴィクトはそれを聞いてまずは目を顰めさせた。

「私は確かに今は死んだ身です」

穏やかな笑みでそれは認める。その笑みは生きている時と変わらないものであると思われた。

「しかし。心はそのままなのです」

「心はですか」

「そうです」

そう二人に語る。

「私は。生きている時と同じ心を持っているのです」

「まさか」

ベネヴィクトはその言葉を否定してきた。

「貴方は死んでいます。それに」

「それに？」

「街の家々の扉にあったあの大蒜は。貴方への為のものではないのですか！？」

「あれは誤解です」

答えるその言葉が悲しい音色になっていた。

「あれが何を意味しているのかは私も知っています」

「吸血鬼」

「そう、吸血鬼へのものです」

そうベネヴィクトに答える。

「ここにいて暫く経っていましたから。それはわかっていました」

「わかっておられたのですか」

「はい。そして貴方達の御考えを」

そう述べてきた。

「貴方達は私を吸血鬼とっておられるのですね」

「はい」

ベネヴィクトがアレクセイの言葉に頷いてきた。

「違うのですか？」

「確かに私は死にました」

自分でもそれは認める。

「ですが。吸血鬼ではないのです」

「違うのですか」

「はい」

穏やかな笑みで頷く。

「私は。肉体がありませんから」

「肉体はないと」

「そうです」

また答える。

「吸血鬼は肉体があり、そこに邪な霊となつて宿るものです。今の私は」

「確かにそうですね」

グレゴリオは今のアレクセイを述べてまた言ってきた。

「貴方に肉体はない。そして」

「私は。生きていた頃と同じ心を持っています」

また二人に述べる。

「それを務めて守ってきました」

「あの」

ベネヴィクトはここで首を傾げてばかりだった。アレクセイの言葉にわからない部分が見られるからだ。彼はあくまでカトリックでありスラブの考えに疎かったのだ。

第八章

「どういうことでしょうか」

「それはですね」

アレクセイが彼に述べてきた。

「人は変わりますね」

「はい」

一旦その言葉に頷く。

「それはわかっているつもりです」

「それは死んでからも同じなのです。正確に言えば死ぬ時に」

「変わると」

「そうです。ですから」

アレクセイはさらに言う。

「私は確かにあの時恨みました。何故死んだのか」

ここで俯く。

「この街の人達を救おうと隣町の間に入って。そして」

その時のことを思い出す。目が悲しくなっていた。

「誤って流れ弾に当たって。そのせいで」

彼が死んだのは銃撃が行われているその時に間に入ったのだ。そうしてその中で流れ弾に当たり死んだのだ。そのことは死んだ今でも覚えているのだ。

「死んだのですから。死んだ時にこのことを恨んだのは事実です」

「それでどうして」

ベネヴィクトは彼に問うた。

「今こうして穏やかな顔に」

「私は死に埋葬されることになりました」

キリスト教においては土葬だ。これはカトリックも正教も同じである。吸血鬼伝説もこれが元の一つになっている。生ける死体こそが吸血鬼だからだ。

「しかしそこで見たのです」

「何をでしょうか」

今度はグレゴリオが問うてきた。

「街の人々が。私を囲んで」

「貴方を」

「はい、泣いていたのです」

そう言つて静かに微笑んできた。やはり穏やかな笑みであつた。

「私の死に対して」

「そうだったのですか」

「この街の人達だけでなく隣の街の人達も」

「なっ」

ベネヴィクトはそれを聞いて思わず声をあげた。

「隣街はセルビア人の街ですよね」

「そうです」

ベネヴィクトの言葉に頷く。

「そして彼等は」

「正教徒です」

またベネヴィクトの言葉に応える。これはベネヴィクトにとつてもグレゴリオにとつても驚くべきことであつた。思わず言葉を失う程だつた。

「その彼等がです」

「まさか」

これにはグレゴリオも信じられなかつた。首を傾げて横に振るばかりであつた。

「そのようなことが」

「ですがこれは本当のことです」

驚きを隠せない二人に対してまた言つた。

「私はこの目で見たのですから。私の亡骸を囲んで泣いてくれる皆さんを」

「そうだったのですか」

「そうです」

また答える。

「だからこそ私は」

「吸血鬼にならなかつたと」

「奇跡でしょうか」

「いえ」

ベネヴィクトとグレゴリオのその言葉にも首を横に振る。

「それは決して奇跡ではありません」

「違うのですか」

「そうです、ただ。人の心に主が心を打たれただけです」

アレクセイはそう述べる。

「それで私を」

「主が魂を留まらせて下さったのですね」

「そういうことです。それで私は」

「今までここにいられたと」

「そうです。街の方々を怖がらせはしましたが」

しかし彼は決して人を襲いはしなかつた。そうしてにこりと笑う

のだった。

「私はここで待っていたのです」

「待っていた!？」

「そうです」

また答える。

「貴方達が来られるのを」

述べるのであつた。

「ずっと待っていました」

「私達をですか」

「このことを。ずっとお伝えしたいと思っていました」

笑みは次第に神々しいものになる。そうしてそれは二人にも伝わった。

「貴方達に対して」

「そうして」

また言う。

「ここにいたのです。このことを伝えたくて」

「貴方のその心を」

ベネヴィクトはそれを今知った。

「おわかりでしょうか。私はできると考えているのです」
顔を上げる。澄み切った顔で。

「何時か。ここでも平和が訪れると」

「このバルカンにですか」

グレゴリオはそれを聞く。

「平和が」

「そうです」

今三人の心にバルカン半島のことか思い浮かんだ。それまで戦乱に覆われ飽くなき殺戮が繰り返されてきたこの半島を。今思い浮かべたのである。

「確かに人は悲しい存在です」

ここで一旦悲観的な言葉を口にした。

「ですが。それ以上に」

「それ以上に」

「私は期待します」

こう言うのだった。

「人の心を。これはあらゆるものを越えて」

「民族も」

「全てを」

「そう、そうしたものの垣根を全て越えてお互いを理解できて」
「それは可能でしょうか」

ベネヴィクトはその言葉に俯いた。

「果たしてそんなことが」

「できます」

しかしアレクセイは言うのだった。

「私はそれを見ましたから」

「きつとですか」

「残念ですが私は生きてそれを見届けることはできません」

それは認めるしかなかった。既に彼の肉体はないからだ。それは既に地の底だ。こうなってしまうばもつどつこうすることもできない。しない。

第九章

「ですからこれからは」

「これからは」

「貴方達に御願いたいたいのです」

そう二人に伝える。

「宜しいでしょうか。これからも苦難があると思います」

「ええ」

「おそらくは」

それは二人もわかっていた。これまでのバルカンの歴史は憎悪と流血の歴史だ。それが容易に変わるとはとても思えない。無論これはアレクセイもわかっている。

「しかし。決して諦めないで下さい」

「決してですか」

「そうです」

またグレゴリオに言う。

「諦めずに先に進んでいけばきっとそれは果たされますので」

「ではこれからは私達がここで」

「そうです」

述べるその言葉は澄んでいる。まるでアレクセイの心そのものように。その澄んだ声の前にはどのような飾りも美辞も必要はなかったのである。

「全ては貴方達次第です。私は貴方達に全てをお任せします」

「宜しいですね」

ベネヴィクトはアレクセイのその澄んだ目を見て問っていた。何時しかベネヴィクトは彼に教えを乞うような様子になっていたのだ。

「私達で」

「私もまた。普通の神父でした」

アレクセイはそうベネヴィクトの言葉に答える。

「ですから貴方達もきつと」

「果たせると」

「人は不思議なものです」

「ここでこう言うのだった。」

「願っていないことは果たせませんが願いを最後まで捨てなければ」

「果たせるもの」

「何時か。きつと」

アレクセイはまた言った。

「果たせませぬ。ですから貴方達にそれを」

「それでは」

グレゴリオは遂にその言葉を受けた。

「受けましよう、それを」

「神の御意志として」

「そう、これこそが神の御意志」

アレクセイはベネヴィクトの今の言葉に対して述べてきた。

「そうなのです。それを貴方達に」

姿が消えていく。その中で最後の言葉になる。

「お任せします。それでは最後の審判の時に」

そこまで言つて姿を消す。後には何も残つてはいなかった。

何時しかステンドグラスから明るい日が差し込めていた。その光が色とりどりの光を映し出して教会の中を奇麗に染め上げていた。

グレゴリオとベネヴィクトはその光をまるで神の奇跡のように感じて恍惚とした顔をしているのであった。

「ベネヴィクトさん」

グレゴリオは光を見たままベネヴィクトに声をかける。

「今全てが決まりました」

「はい」

ベネヴィクトもその言葉に頷く。

「私達の使命が」

「そうです。この国で
彼は言う。」

「きつと平穩をもたらしましょう、私達のできることが僅かであつても」

「その僅かな力がきつと」

「そうです、それが大きくなつていつて」

グレゴリオはまだ光を見ていた。それはベネヴィクトも同じであつた。

「素晴らしい力になるでしょう」

「そうですね。そしてその素晴らしい力こそが」

「神の御意志なのです」

二人はそれを確かめ合う。既にその顔には荒野を進んでいた時の悲しみも絶望もなかつた。苦難を見据えたうえで前に進もうという、毅然とした顔であつた。

「苦難は多いです」

グレゴリオは自分でもそれを言う。

「しかし最後まで諦めなければ」

「アレクセイ神父も仰つていたように」

「きつと希望があります」

廠かな声になつていた。それこそが心の高まりであつた。

「最後には必ず」

「私達の代では果たせないかも知れないですね」

「何、それも覚悟のうえです」

グレゴリオは笑顔でそう述べる。やはりその笑みには迷いも憂いもなかつた。全てを吹っ切つた、そうした悟りきつた笑みになつていた。

「何もかも」

「ではグレゴリオさん」

ベネヴィクトもまた廠かな声になつていた。その声で言う。

「まずはこれからは」

「はい、一つやるべきことがありますね」
「そう言葉を交あわせる。」

「アレクセイ神父の名誉を回復させ」
「神父の志を街の人々に伝える」
「そう言い合っ。」

「まずはそれからです。神父の志を残すことこそが」
「最初の一步なのですから」
「では」

ベネヴィクトは強い声を出した。厳かな中に強さが宿る。
「行きましよう、今から」

「そうですね、今から」
「グレゴリオも彼の言葉に頷く。」

「アレクセイ神父の志を伝えるに」
「何時かきつと来る平和の為に」

二人はそう言うつと一旦教会を出た。後には神々しいステンドガラスの光が残っていた。それを背にする十字架のイエスは心なしか笑っているように見えた。

それから長い時が経った。多くの戦乱があり多くの命が失われた。それはユーゴ全土に拡がりこの半島は憎悪と流血に彩られ続けた。しかし二つの街だけは別だった。

「みんなあの教会のおかげだよ」
「クロアチア人達もセルビア人達も口々にこう言うつ。」

「あの教会がなかったら」
「俺達は他の街と同じようになっていた」

他の様々な街のように。飽くなき殺戮と蛮行が支配していることになっていたのであるつと。口を揃えてこう言うつのであった。

「けれど二つの街にはそれはないさ」
「教会があるから」

そう言うつと教会を見る。小さな古い教会を。
見てみると有り触れた教会だ。何の変哲もない。

しかしそこには何かがあるという。それは何かは二つの街に伝わっている。

「一人の神父様がわし等の為に命を落として」

「その後の二人の神父様達がそれを教えてくれた」

「これが彼等の言葉だ。全てを懐かしむような声で語るのだ。」

「それが今の平和をもたらしてくれたんだ」

「私達の目を覚ましてくれて」

今その教会にいるのは一人の若い神父だ。彼は厳かにこう言う。

「道は果てしないです」

澄んだ、穢れない声で。言う。

「しかし諦めずに先を進んでいけば」

顔を上にあげる。その先に遙かな夢を見て。

「きつと。アレクセイ神父の願いは果たされます。この半島に永遠

の平和を」

「皆が仲良く笑い合って暮らせる場所を」

「幸せを」

幸せという言葉聞き救われたと思った。今は到底無理でも何時かは。何時かはきつとこのバルカンにも。僕も今それを信じたいと思つた。

三人の神父 完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7779c/>

三人の神父

2009年7月1日21時21分発行